

「～ながら」の意味・用法について

—逆接表現を中心に—

陳 芬慧

キーワード 「～ながら」の分類、累加、「～でありながら～でもある」、制約、「～ながらも」

1 はじめに

従来、「逆説」「逆接」「逆態」などの名称で研究の対象とされてきた逆接表現には、「～けれども」「～が」「～のに」「～ながら」「～ても」などがある。先行研究は「～ながら」の用法を同時の「～ながら」と逆接の「～ながら」の二つの用法に分けている（南（1974）、森田（1980）、堀川（1994）、池上（1997）、和田（1998）など）。これらの研究の中には、「～て」「～ながら」に関する階層関係をなす根拠を明らかにする堀川（1994）、「～のに」「～ながら」「～ものの」「～けれども」四者の意味と用法を考える池上（1997）、そして「～ながら」節のアスペクトから同時進行の「～ながら」と逆接の「～ながら」を区別する和田（1998）などがある。本稿では前述した先行研究を検討した上、「～ながら」の用法を整理し、これらの研究が触れていないものと、説明が不十分だと思われる部分を明らかにしていきたい。

2 先行研究について

2-1 堀川（1994）、池上（1997）、和田（1998）

「～ながら」についての研究には、堀川（1994）、池上（1997）、和田（1998）などがある。まず堀川（1994）は助詞「～て」と「～ながら」を分析することによって、従属節の従属度を考察したものである。堀川（1994）は、「同時性」と「逆接性」を表す「～ながら」が根底的に持つ共通構造を「共存性」にあると規定している（堀川1994：36）。「～ながら」の二用法の間に、「共存性」という共通構造があり、「時間的な共存性」は「同時性」で、「非時間的な共存性」は「逆接性」であると述べている。池上（1997）は「～のに」「～ながら」「～

ものの「～けれども」四者の使い分けの条件を考えつつ各々の意味と用法について研究している。「～ながら」には「～のに」に近い用法と、「～もの」に近い用法の二種類があると述べている。和田（1998）は「～ながら」節のアスペクトから同時進行の「～ながら」と逆接の「～ながら」を区別している研究である。和田（1998）によると、「～ながら」節のアスペクトが継続相であれば「同時進行」で、「～ながら」節のアスペクトはパーフェクトであれば「逆接」である。パーフェクトとは「ある設定された時点においてそれよりも前に実現した運動が引き続き効力を持っていること」を表すアスペクトである。このことから逆接の「～ながら」文において、「～ながら」節は主節に先行して起こるという使用条件が導き出されている。

2-2 先行研究の検討

池上（1997）では、名詞、形容動詞述語の場合、「～ながら」文は「～でありながら」の形をとることによって「～のに」文と近い意味を表していると主張している。しかし「逆接」の意味の例文（1b）より、「二つの事態が同時に存在する」意味の（1c）の方が（1a）の意味に近いと感じられる。

（1a） 彼女は娘でありながら、母親でもある。

（1b） 彼女は娘であるのに、母親でもある。

（1c） 彼女は娘であると同時に、母親でもある。

また「～ながら」には「～のに」と同じく、「累加」という用法があると主張しているが、その「累加」という用法については説明していない。

（2） こんなに親切にして頂きながら、その上お土産まで頂いてしまって
...

（池上1997：22）

一方、和田（1998）は、例文（3）は容認されないと指摘している。しかし、（3）は容認されると考えられる（日本語母語話者に例文を判断してもらった）。

（3） *風邪をひきながら薬を飲んでいない。 （和田1998：103）

以上のように、先行研究はまだ不十分であることがわかる。

3 「～ながら」の分類について

接続助詞としての「～ながら」の用法を、森田（1980：357）は「意志的な動作動詞の連用形に付いて、次に述べる動作と同時に副次的な動作が行われることを表す」ものと「無意志的な動作動詞や状態動詞、動詞＋ている、などの連用形、形容詞の連体形、形容動詞や副詞の語幹、体言、打消し「ない」など

に付いて、その状態や状況にふさわしくない事態・事柄が同時に存することを表す」もの、の二つに分類している。本稿でも「二つの事態・事柄が同時に存在する」ということを表すのが「～ながら」の基本的な用法であるととらえている。「～ながら」の用法を同時進行の「～ながら」、同時進行と逆接性の両方を表す「～ながら」、同時性と逆接性の両方を表す「～ながら」、二つの類似事態が並列している「累加」の「～ながら」に分類している。ここでいう「逆接性」というのは、前句の事柄と後句で述べられる事柄とは、一般的に考えれば、両者が共に成立するのはふさわしくない、つり合わないという意味である。

3-1 同時進行の「～ながら」

例文(4)のように、動作動詞に付き、アスペクトは「継続相」で、次に述べる動詞と同時に動作が行われることを表す「～ながら」は同時進行の「～ながら」である。

(4) ラジオを聞きながら勉強している。

続いて次の例文を見てみる。

(5) 横になりながら本を読む。

(6) タバコをくわえながら散歩した。

(7) 父は重い荷物のかつぎながら歩いていった。(和田1998:97)

例文(5)(6)(7)の「～ながら」節のアスペクトは「継続相」ではなく、動作の継続を表さない。そのアスペクトは「結果の継続」を表し、(5)(6)(7)は逆接性を含まない例文である。(5)(6)(7)は「～て」に置き換えることができる。「～ながら」節は後件に述べてある動作の行われ方・様子を示している。

3-2 同時進行と逆接性の両方を表す「～ながら」

例文(8)のように、二つの動作が同時に行われ、意味的には相応しない事態を表す「～ながら」は同時進行と逆接性の両方を表す「～ながら」である。

(8) ゆっくりとお茶を飲みながら、心はいつときもはやくその場から逃
ようと焦っていた。(『ガラスの階段』p.23)

3-3 同時性と逆接性の両方を表す「～ながら」

例文(9)(10)のように、二つの事態が同時に存在し、かつその二つの事態が相応しない事態であることを表す「～ながら」は同時性と逆接性の両方を表す「～ながら」である。

(9) このエアー・ターミナルは横浜から十分程歩いたところ、つまり横

浜駅の目と鼻の先でありながら、横浜駅ではないという妙な場所にある。
 (『世界が見える日本が見える』p.105)

- (10) とみは、友子が異常な事故に遭いながら、比較的落ち着いていることに疑いを抱いていなかった。
 (『ガラスの階段』p.54)

3-4 累加の「～ながら」

池上(1997)では「～ながら」には「～のに」と同じように「累加」の用法があると指摘されている。例文(11)(12)を見てみる。

- (11) こんなに親切にしてくさながら、その上お土産まで頂いてしまって
 … (再掲(2))

- (12) 妻を病気で失いながら、更に財産までなくしてしまった。

(池上1997:22)

以上の例文において、それぞれの前件および後件の順序を入れ替えても非文にはならない。というのは主節の出来事「お土産を頂く」「財産をなくしてしまう」より、前件の出来事「親切にしてくく」「妻を病気で失う」は必ず先行して起こり、引き続き効力を持っているとは限らない。このような「～ながら」によって結び付けられる前件と後件は両方ともプラスの事態、もしくは両方ともマイナスの事態である。このような文は話し手の主観の気持ちを省略する場合がある。

3-5 「～でありながら～でもある」の形をとる文

続いて「～でありながら～でもある」の形をとる文について検討したい。

池上(1997)では、「～でありながら」の形をとる「～ながら」は「逆接性」を表し、「～のに」と置き換えられるとされている。しかし、次で示すように、例文(13a)(14a)の前後の事柄の間には、「共存性」が存在している。a文は「逆接」の意味ではなく、「二つの状態が同時に成立する」の意味を表していると思われる。さらにb文と比べてみると「逆接」ではなく前後の事態が同時に存在している意味であることが確認できる。

- (13a) 彼は優秀なピアニストでありながら優秀なオルガニストでもある。

- (13b) 彼は優秀なピアニストであるのに、優秀なオルガニストでもある。

- (13c) 彼は優秀なピアニストであるのと同時に、優秀なオルガニストでもある。

- (13d) 彼は優秀なピアニストであり、かつ優秀なオルガニストでもある。

- (14a) 彼女は娘でありながら、母親でもある。 (再掲(1a))

- (14b) 彼女は娘であるのに、母親でもある。 (再掲(1b))

(14c) 彼女は娘であると同時に、母親でもある。 (再掲 (1c))

(14d) 彼女は娘であり、かつ母親でもある。

例文 (13a) (14a) に近い意味を表している文は (13b) (14b) より、(13c) (14c) また (13d) (14d) であると感じられる。(13a) (14a) において、前件「優秀なピアニスト」「娘」と後件「優秀なオルガニスト」「母親」とは矛盾なく共存している事態である。一人の人間が二種類の楽器を弾けることは可能であり、「ピアニスト」「オルガニスト」二つの身分を兼ね備えることはありえる。また女性が「娘」と「母親」二つの身分を持つのはごく自然なことである。このような前後の内容は職業、社会的身分などの場合、一人で複数の立場にあることが矛盾しないので、「逆接」の意味ではなく、「前後二つの事態の同時性」という表現として使われうる。cdと比べたら、aの「～ながら」の表現は、前後件は同時存在していることだけではなく、その前件の状態のありさま・様子をも表している。

「～でありながら～でもある」という形式をとって前後の二つの事柄が同じ種類の名詞、例えば職業、身分などの場合、後件「～でもある」の「も」は「これでもあるが同時にあれでもある」という意味を表し、「も」をとった「彼は優秀なピアニストでありながら、優秀なオルガニストである」は非文である。続いて (15) (16) を見る。

(15a) 太郎はサラリーマンでありながら、実業家でもある。

(15b) 太郎はサラリーマンであるのに、実業家でもある。

(15c) 太郎はサラリーマンであると同時に、実業家でもある。

(15d) 太郎はサラリーマンであり、かつ実業家でもある。

(16a) 太郎はサラリーマンでありながら、冒険家でもある。

(16b) 太郎はサラリーマンであるのに、冒険家でもある。

(16c) 太郎はサラリーマンであると同時に、冒険家でもある。

(16d) 太郎はサラリーマンであり、かつ冒険家でもある。

(15c) (15d) より、(15b) の方が (15a) に近いと感じられる。というのは「サラリーマン」である人が「実業家」という身分を兼ね備えるのは、成り立たないからである。(16a) において、聞き手が「普通平凡なサラリーマンが冒険家でもあることが考えにくい」と思っている場合には、例文 (16b) の方が (16a) に近い。

前後の二つの事柄とも同じ「である」形式をとる文は、(15a) と (15e) のように、前後の事態の順序を換えても非文にならない。

(15a) 太郎はサラリーマンでありながら、実業家でもある。

(15e) 太郎は実業家ありながら、サラリーマンでもある。

先述した3-4の「累加」という表現と比較してみると、後件にある「その上～まで」「更に～まで」のような表現があるのと同様、「～でありながら～でもある」という表現に、後件の「～でもある」の「も」が入っていて前件と後件の両者の並立という類似点が見られる。逆接を表す「～ながら」も本来「その上」「それでいて」の意を持つ「添加」の機能である。前件の事柄から判断される結果に反する事態が後件にあるとき、「逆接」となる。

4 「～ながら」の制約

「～ながら」を使って逆接を表現する文には、使用上の制約がある。4-1、4-2では「前件」と「後件」に分けてそれぞれの制約について考察する。

4-1 前件の制約

4-1-1 形容詞に付く「～ながら」

次のように、(18) (19) のような文の容認度は低い。

(17) 彼の車は小さいながら、乗り心地が良い。

(18) ??彼の車は大きいながら、乗り心地が悪い。

(19) ??彼は身長が高いながら、バレーボールが苦手だ。

例文 (17) と違い、(18) (19) の「～ながら」節はプラスの内容で、両者とも不自然な文である。「～ながら」は形容詞にも接続するが、形容詞に付き「～ながら」の実例の多くは、前件はマイナスのニュアンスの内容であるが、その主節は逆で、プラスの意味の内容の場合である^(註1)。形容詞に接続する「～ながら」の実例の多くは以下の例文のように「小さいながら」「貧しいながらも」などの表現で、消極的容認の意味を表すと考えられる。

(20) そこに背丈はずっと小さいながら、一緒に泳いできた周二がさきほどまでの彼と同じ姿勢で突立っていた。

(21) 昔の百姓たちが貧しいながらも生活を大事にしていたことの象徴のようなものである。

一方次のような実例もある。

¹ 「CD-ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社版」NEC (1995) (翻訳作品を除く) を使用した。「～ながら」が付く形容詞には「小さい」「かほそい」「短い」「若い」「幼い」「淡い」「弱々しい」「貧しい」「乏しい」「低い」「薄暗い」「苦しい」「古い」「弱い」「恐い」「硬い」「懐かしい」「うれしい」「恥ずかしい」などの実例がある。

- (22) それから何食わぬ顔で、すっかり酔っぱらってしまった弟を懐かしいながらも面目なく感じてますますむずかしい顔をしている徹吉にむかって声をかけた。
- (23) それにしても、もし自分が死なねばならぬとしたら、恥ずかしいながらもやはり自殺のほかはあるまいと、私は思いこんでいた。
- (24) 「何もそこまでなさらなくても」とお万阿はうれしいながらも庄九郎が気の毒になってしまった。

(20) - (24) は『CD-ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社版』より

例文 (22) (23) (24) の「懐かしい」「恥ずかしい」「うれしい」はマイナスのニュアンスの形容詞とは思えないが、後の主文にある物事の展開にとっては妨げになる事態である。そういう妨げになる事態が存在しているが、主文にある物事の展開は順当に進んでいるという意味である

4-1-2 「～ない」形に付く「～ながら」

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社版』NEC (1995) を検索した結果、数は少ないが、動詞の否定形に付く「～ながら」の実例は以下のように「知らないながらも」「よく分からないながら」「出来ないながら」「触れないながら」などがある^(註2)。

- (25) 理由を知らないながらも、何となく不快に思ったのは…
- (26) 老齢のものは、よく分からないながらも感心した。
- (27) …出来ないながら申し上げますと、…
- (28) …直接には触れないながら、つぎのようなことを聞かされねばならなかった。

(以上の例文は『CD-ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社版』より)

以上の「～ながら」が付く動詞は「食べる」「走る」のような動作動詞ではなく、動作の継続を表さない状態動詞が多い。

続いて形容詞の否定の場合をしてみる。

- (29) ??安くないながら、とてもいい服だ。

以上の例文のように、前件が「～ない」形をとる表現の容認度は極めて低い。「～ながら」が形容詞の否定形に付きにくい理由として、次のようなことが考えられる。前件にある「～ない」はその状態を打ち消して、事態を特定しない

² 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社版』NEC (1995) (翻訳作品を除く) を検索した。「～ない」に付く「～ながら」には「知らない」「出来ない」「解らない」「分からない」「はっきりしない」「形を成さない」などの実例がある (9例)。

表現である。このような前件が特定できない事態である「～ながら」文の容認度は低いと考えられる。一方、以下の例文のように、助詞「は」による取り立ての表現をとると、自然な文になる。助詞「は」が割り込むかたちで認識の表明が表される（その範囲に限っての強い否定的主張をしている）のであり、文の容認度は高められると思われる。

(30) 安くはないながら、とてもいい服だ。

(31) 新しくはないながらも、こぎれいだ。 (『日本語教育事典』p.397)

4-1-3 疑問詞を含む「～ながら」

「～ながら」の前件には「既定的」な内容しか現れないという指摘がされてきたが、「既定的」であるというのは話し手が前件を既定的な事柄であると判断していることを意味する。前件には「いくら」「どんな」などの「既定的」でない疑問詞を含む表現は現れない。これは前件が「特定できない」事柄であるため、非文になる。

(32) *いくら勉強していながら合格できなかっただろう。

(33) *どんなに勉強していながら合格できなかっただろう

4-2 後件の制約

4-2-1 主節に「～ていない」が入る「～ながら」

まず主節に「～ていない」が入る「～ながら」について考察する。和田(1998)は、例文(34)は容認されない文であると指摘している。しかし、次のように、このような主節は「～ていない」の形である文は容認されると考えられる。

(34) 風邪をひきながら薬を飲んでいない。 (再掲(3))

(35) リストラをされながら、仕事を探していない。

(36) インフルエンザにかかりながら、会社を休んでいない。

例文(34)(35)(36)の「ながら」節にある事態は主節より先に起こっている。設定時点として発話の時点が考えられる。

4-2-2 モダリティ

続いてモダリティの種類から主節の使用上の制約を分析していく。

4-2-2-1 禁止

中右(1994)によると、「な」によって表現される禁止文は命題の否定を命令することになる。例文(37)において、前件・後件が「～ながら」によって

密接に結び付けられている。語尾の「な」は「だめだと分かっているながら挑戦する」全文にかかっている。

- (37) だめだと分かっているながら、挑戦するな。
 [だめだと分かっているながら、挑戦する] な。

4-2-2-2 命令・意志・勧誘

例文 (38) - (41) は非文である。

- (38) *だめだと分かっているながら、挑戦しろ。
 (39) *だめだと分かっているながら、挑戦しよう。
 (40) *だめだと分かっているながら、挑戦しませんか。
 (41) ??だめだと分かっているながら、挑戦したい。

以上の例文が非文になるのは、話し手が不相応であると判断する事柄を相手に勧めていることが原因である。話し手にとって前件と後件が相応しない関係にあるが、前件と共立しないはずである後件を聞き手に勧めたり、自分でしようとするという矛盾が生じる。それに代わって次のような表現は許容される。これは話し手が後件と相応しない事柄をしないように、意志を表明したり、勧誘したりしているからである。

- (42) だめだと分かっているながら、挑戦するのやめよう。
 [だめだと分かっているながら、挑戦する] のやめよう。
 (43) だめだと分かっているながら、挑戦するのやめませんか。
 [だめだと分かっているながら、挑戦する] のやめませんか

4-2-2-3 疑問文

次のように、「～ながら」は純粋な疑問文、「のだ」による疑問文、「どうして」などの疑問詞疑問文すべてに使用できる。

- (44) だめだと分かっているながら、挑戦しますか。
 (45) だめだと分かっているながら、挑戦するのですか。
 (46) だめだと分かっているながら、どうして挑戦するのですか。

5 主語

基本的に、「～ながら」によって結び付けられる文の主体は同一であるが、これは絶対的な条件ではない⁽⁴³⁾。例文 (47) (48) のように、逆接表現「～ながら」文の主語は同一ではないが、前件の主語と後件の主語は共通する関係を

持っている。例えば例文 (47) において、両主語「彼」と「彼女」は夫婦もしくは親友などの関係にあり、通常行動を共にすることが予想される。また (48) において、「私」は「電車」で面接の会場へ行き、「私」が「面接」に間に合うには、電車が正常通り運転されることが前提となっている。「電車」と「私」両者は、共に主節の「面接」ということと関わっている。

(47) 彼が来ていながら、彼女は来ていない。

(48) 電車が一時間も遅れながら、私はなんとか面接の時間に間に合うことができた。

6 「～ながらも」について

和田 (1998) は「～ながら」節のアスペクトから同時進行の「～ながら」と逆接の「～ながら」を区別している。「～ながら」節のアスペクトが継続相であれば「同時進行」で、パーフェクトであれば「逆接」である。パーフェクトとは「ある設定された時点においてそれよりも前に実現した運動が引き続き効力を持っていること」を表すアスペクトである。

この「～ながら」節のパーフェクトという観点で見ると動詞に付く「～ながらも」は二種類に分けることができる。一つは「～ながら」節のアスペクトが継続相で「同時進行と逆接性の両方」を表す「～ながらも」である。この「～ながらも」の「～ながら」節は動作の継続を表すため、前件と後件は「同時進行」である。一方、前件と後件はふさわしくない事態でもあるので「逆接性」をも含んでいる。「～ながらも」の「も」を取って「～ながら」に変えても容認されるが、「～ながら」に変えると、文の内容や聞き手の判断によって「同時進行」だけの意味に解釈することもできる。「逆接性」が不明確な場合や話し手が強調したい場合、「～ながらも」を使用して表現する。(49) - (52) はこのような「～ながらも」の例である。

(49) 「お前、もう十二時前やぞ」勇はそう言いながらも、手を真っ黒にさせて、望遠鏡を組み立てた。(『星々の悲しみ』p.47)

(50) その巨大な生物は、荒れ狂う波浪に翻弄されながらも、確かにひとつの意志を持って自らの体のある水域へ運ぼうとしていた。

(『遠い海からきたCOO』p.3)

(51) 奇妙なことに、恐怖におののきながらも僕は、その、霊とおぼしき

³ 堀川 (1994) はこれについて指摘している。

存在の生前の人柄を考えていた。 (『普通の生活』 p.22)

- (52) 原文の英語版の中の、主人公イチローと一世である両親との日本語による会話が、日本語版のなかでも日本語で交されているあたりに、(それは当然のことなのだが)、奇異な感じをうけながらも、読み切り、日系二世にとっては、英語が母国語なのだという、今さらながらの感想と認識を噛みしめたものである。 (『普通の生活』 p.131)

もう一つの「～ながらも」は「～ながら」節のアスペクトがパーフェクトの時の「～ながらも」である。このような文は動作の継続を表さず、前件と後件は「同時進行」の事態ではない。「も」を取って「～ながら」に変えても「順接」を表すことはできない。

- (53a) 昨日太郎は学校に行きながらも、授業にはでなかった。
 (53b) 昨日太郎は学校に行きながら、授業にはでなかった。
 (54a) 彼はすでに死にながらも、僕たちの心の中では生き続けている。
 (54b) 彼はすでに死にながら、僕たちの心の中では生き続けている。

7 おわりに

以上先行研究で残された問題点を検討しながら、「～ながら」を分析した。ここで簡単にまとめる。

「～ながら」の用法を同時進行の「～ながら」、同時進行と逆接性の両方を表す「～ながら」、同時性と逆接性の両方を表す「～ながら」、累加の「～ながら」というふうに分類できると考えられる。「こんなに親切にして頂きながら、その上お土産まで頂いてしまって…」 「妻を病気で失いながら、更に財産までもなくしてしまった。」のように、累加の「～ながら」は前件と後件は両方ともプラスの事態、もしくは両方ともマイナスの事態であるというような用法である。このような文は話し手の主観の気持ちを省略する場合がある。

「～でありながら～でもある」形式の文は、文の内容により、「逆接」ではなく「二つの事態が同時に存在する」というような表現である。「これでもあるが同時にあれでもある」という意味で「も」を除くことができない。

前件の制約に関して、形容詞にも接続するが、それ自体は少々マイナスのニュアンスのものが多く、消極的容認の意味を表す。

動詞の否定形に付く「～ながら」の実例があるが、形容詞の否定形に付く実例は見当たらない。「～ながら」が形容詞の否定形に付きにくい理由として、次のようなことが考えられる。前件にある「～ない」はその状態を打ち消して、

事態を特定しない表現である。このような前件が特定できない事態である「～ながら」文の容認度は低いと考えられる。一方、助詞「は」をつけて、「～はないながら」の形をとると、文法性が高くなる。助詞「は」が割り込むかたちで認識の表明が表される（その範囲に限っての強い否定的主張をしている）のであり、文の容認度は高められると思われる。

また「いくら～ながら」「どんなに～ながら」などの表現の容認度は非常に低い。

後件の制約について、禁止や否定の語を含む「後件と相応しない事柄をしないよう」というような命令・意志・勧誘であれば、「～ながら」と共用できる。共通する基盤を持っていれば、「～ながら」によって結び付けられる文の二つの主語は必ずしも同一であるとは限らない。

同じ「～ながらも」の表現をとるが、動詞に付く「～ながらも」は二種類に分けることができる。まずは「～ながら」節のアスペクトが継続相で「同時進行と逆接性の両方」を表す「～ながらも」である。このような「～ながらも」の「～ながら」節は動作の継続を表すため、前件と後件は「同時進行」の事柄である。一方、前件と後件はふさわしくない事態でもあるので「逆接性」をも含んでいる。「～ながらも」の「も」を取って「～ながら」に変えても容認されるが、「～ながら」に変えると、文の内容や聞き手の判断によって「同時進行」だけの意味に解釈することもできる。「逆接性」が不明確な場合や話し手が強調したい場合、「～ながらも」を使用して表現する。

もう一つの「～ながらも」は「～ながら」節のアスペクトがパーフェクトのときの「～ながらも」である。このような文は動作の継続を表さず、「同時進行」を表さない。「も」を取って「～ながら」に変えても「順接」を表すことはできない。

参考文献

- 池上素子1997 「『のに』・『ながら』・『ものの』・『けれども』の使い分けについて」『北海道大学留学生センター紀要』第1号pp.18～38
- 今尾ゆき子1994 「条件表現各論—ガ/ケレド/ノニ/クセニ/テモ—談話語用論からの考察—」『日本語学』13巻9号pp. 92～103 明治書院
- 工藤真由美1989 「現代日本語のパーフェクトをめぐる」『ことばの科学3』むぎ書房
- 小泉 保1987 「譲歩文について」『言語研究』91 pp.1～14

- 鈴木一彦・林 巨樹1985 『研究資料日本文法⑦助辞編（三）助詞・助動詞辞典』 明治書院
- 富田隆行1997 『続・基礎表現50とその教え方』 凡人社
- 中右 実1994 『認知意味論の原理』 大修館書店
- 仁田義雄1987 「条件づけとその周辺」『日本語学』6巻9号pp.13～27 明治書院
- 日本語教育学会編1982 『日本語教育事典』大修館書店
- 堀川智也1994 「文の階層構造を考えることの意味」『日本語日本文化研究』4 pp.31～44 大阪外国語大学日本語講座
- 前田直子1995 「ケレドモ・ガとノニとテモ—逆接を表す接続形式—」『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』 pp.441～450 くろしお出版
- 南不二男1974 『現代日本語の構造』 大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則1992 『基礎日本語文法—改訂版』 くろしお出版
- 森田良行1980 『基礎日本語2』 角川書店
- 森田良行・松木正恵1989 『日本語表現文型』 アルク
- 和田礼子1998 「逆接か同時進行かを決定するナガラ節のアスペクトについて」『日本語教育』97号 pp.94～105

用例出典

- 『世界が見える日本が見える』 大前研一（1989）、講談社文庫
- 『普通の生活』 景山民夫（1988）、角川文庫
- 『遠い海から来たＣＯＯ』 景山民夫（1992）、角川文庫
- 『ガラスの階段』 津村節子（1984）、文春文庫
- 『星々の悲しみ』 宮本 輝（1984）、文春文庫
- 『CD—ROM版 新潮文庫の100冊 新潮社版』NEC（1995）